

グッバイダーリン

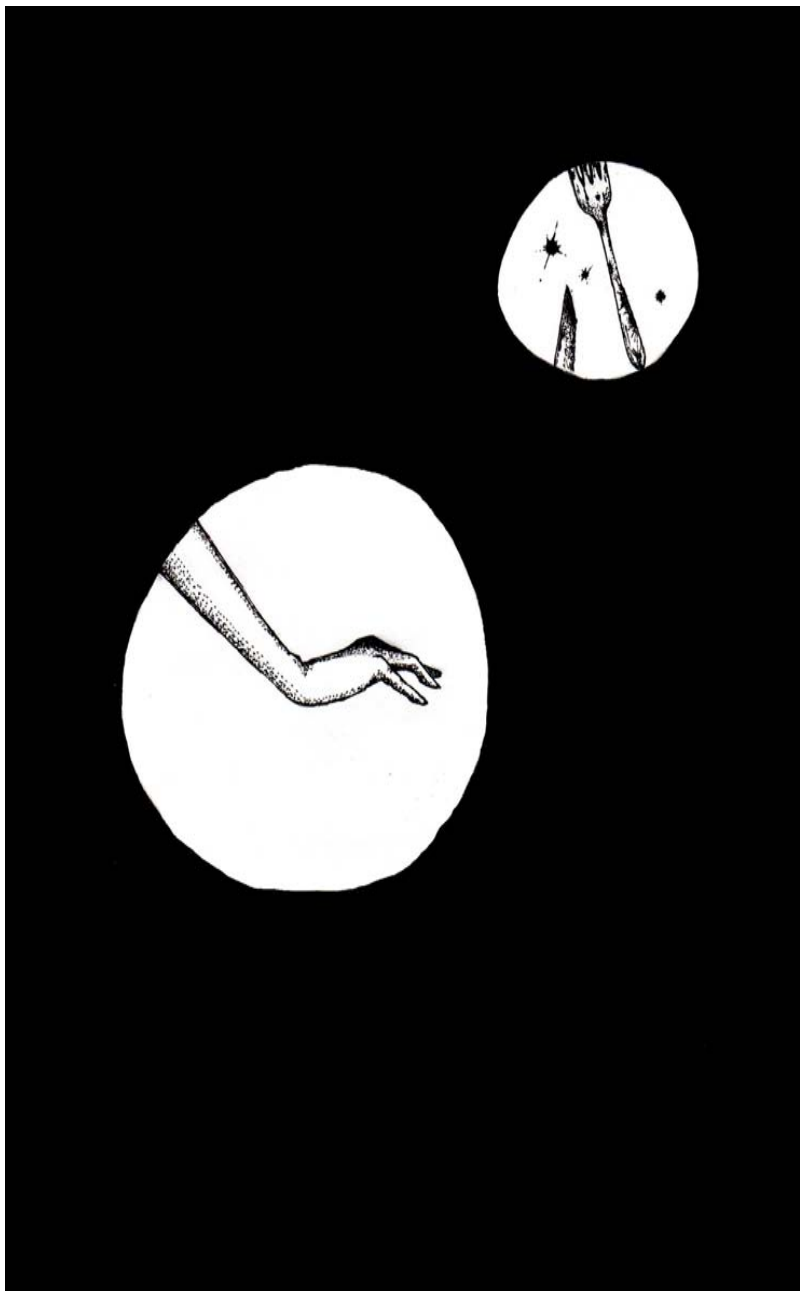
亀

喧騒はいつだって遠くに聞こえる。あたしはその輪の中で生きていけないの。海水が傷口に浸みこむように、周りの声はあたしを不愉快に蝕んでいく。喧騒の原因が祭りだってことくらいは知っているのだけれど、それ以上のことは忘れてしまった。クラスの子たちが男の子を連れ添って夏季講習の合間を縫ってわざわざ行つてくるとは言っていたけれど、そんな中に行く意味が見当たらなかった。だって、踏切の奥を覗いても、祭りの中を探しても、あたしの探すあの人はいないんだもの。いたとしても、あたしの望む姿なんてしていないのよ。知ってはいるわ。知っていたところで、わずか、希望は残ってしまっていて、どうにかしてそれをスプーンですくっ

て食べてしまえたら、と思わずにはいられない。それくらい希望なら、きつと食べたところで甘い味だけが残って私が幸せに終われると思うから。そんな希望を打ち消してみたくて、ぶらっと歩いた。きつと、歩けば、もっと周りを見渡せば絶望を突きつけてくれるって、信じているの。一番手前の、少し人ごみから外れたところに露店を出しているタコ焼き屋さんまで行ってみた。ここならまだ、あたしはあたしのかたちを保っていられる。

「お嬢ちゃん、タコ焼きいるかい？ 安くしたげるよ」

「うーん、それじゃあ、一パック頂戴」
唇がぬるりと動いていく。店のおじさんの唇も、



気持ち悪く笑顔を作った。きつとおじさんが厭らしく見えるのは、あたしの心もちが厭らしいからなのだろうけれど、そんなことは前から知っていた。誰かが笑うたびにそれを突きつけられるのは辛いけれど、もう辛いことに慣れてしまっている自分もいる。「タコ焼き、大きいんですね」

奥に見えるタコ焼き器の穴は、野球ボールくらい大ききだった。おじさんはあたしに背を向けるようにしてその中に生地を流し込んでいく。火が通るのに随分かかりそう。タコ焼きをそこまで無理して大きくする理由はあたしには見当たらない。

「タコも大きいんですね？」

「ま、そうだねえ」

おじさんは笑う

「焼くまで時間かかるから、世間話でもしようか」

「世間話ですか？」

「そう、世間話だよ。くだらない話だ。機材が大きすぎて、そちらを向いて作業出来ないのが申し訳ないんだけどねえ、まあ、それを気味悪がって欲し

くないんだよ。例えば顔の見えない俺みたいな人間だって、くだらないことを考えてくだらなく生きていく。お嬢ちゃんだってそうだろう？」

「はあ」

「世間というのは仏教用語で『移り変わり、破壊を免れない迷いの世界』を指す言葉らしい。そのお話をすればいいのさ。迷いの世界とは自分だと思ふのなら、自分の話をしてもいいし、高尚な持論があるならそれを展開すればいい。まあ、仏教用語なんて堅苦しいお名前を出したけれども、俺には学がない。たぶん、君程もない。だから『世間』という言葉についてのおうと怪しげな文献や都市伝説を引用して使ったりもできる。逆を言えば、正しいニュアンスの『世間』という意味を知らない。つまりだ、俺は君の話が聞きたい」

「あたしの話ですか？」

返答はない。あたしは、頭の中を少し探ってみて、そしてようやく「他愛もない話題」を見つけることに成功した。おじさんは相変わらず背中を向けている。隣からボウルを引っ張ってきた。

「この間見た夢なんですけれど、それでもいいですか？」

「夢？ なかなかいい趣味をすると思うよ」

話してごらん、とでも言うかのようにおじさんはそれっきり口を閉ざした。

「やたらと月が綺麗だった晩に見たんです。だからと言って、月が出てくるわけじゃありませんが……」

目が覚めたら、真っ白の部屋にいた。纏っている服も、真っ白のワンピースだった。こんな服何年振りだろう。なんかのゲームの序章みたい。「ココカラ脱出シマセンカ？」なんて、電子音が問いかけたのなら完璧になったはずなのに。でも、ここがゲームの中なんて夢^{ゆめまぼろし}あるわけじゃないわ。あたしはあたしの自我があるし、そもそも非現実的だもの。それを言ってしまったら目が覚めたら知らない部屋にいてってこういう状況だって十分非現実だけど、もしか

したら誘拐されたり、乱暴されそうになっていたり、そういう状況だって考えられる。寧ろそっちのほうが現実的だなんて、自分で考えてちよつと怖くなった。だってその考えで言ったら、殺されたり乱暴されたりするのってあたしじゃない！ ああ、そうか、ここですべてでもドラダラしているわけにもいかないのかもしれない。白いベッドの上、とりあえず地に足をつけようと思つて裸足で白いタイルの上に足を下ろす。白いタイル、ペタペタして気持ちが悪い。足にタイルが吸いついてくる。逆かな、タイルが足に吸いついているのかも。タコの吸盤みたいな凸凹がついたタイルを想像して一瞬ひやつとしたけど、タイルを見たらそんな凸凹はなかった。でも、よくよく見るとモザイク模様みたいに一つ一つタイルの形が違うのね、何かが描いてあるみたい。よくよく目を凝らせども、すべて白のそのタイルが何を意味しているのかはわからない。せつかくおしやれなのにもつたいない。

白のペティギアのはがれかかった足（こんなの塗った覚えがないのに、もはやここまで徹底されて

いると宗教的な臭いまで感じてしまう）から、視線を少しずつ上にあげていく。白いタイル、タイル、そして見つけたのは誰かの腕だった。肘から下。一瞬悲鳴をあげそうになったけど、思っていたよりもずっと頭の中は冷静だった。悲鳴を上げるよりも前に右手が口を押さえて、あたしの胸の動悸は左手ですぐにおさめられた。腕に近づいてみる。どこかで見たことがあるような気がしたけど、よくよく考えたら腕なんてどこでも見るよね。あたしの体にもついているもの。ところで、これは誰の腕なんだろう。腕の前に体育座りをしてみた。何か棒はないかなと思っただけ、見当たらなかった。しょうがないから触ってみると、なんだか粘土みたいで、ちよつと冷たい。不謹慎だけど気持ちよかった。断面が赤黒いから、たぶん本物なんだろう。これは右腕らしい、人差し指の付け根に大きなペンダコがある。普通に鉛筆を持っていたらできるはずの無いペンダコがそこに確かにあった。もしかしてあたしが好きなあの人の腕かな、なんて思ったら急に愛おしく感じた。あの人の人差し指の付け根にも、奇妙なペンダコがあった

のだもの。

この部屋のどこかの時計の針がガチンと音をたてて時間が経過していることを告げる。時計を探して目を凝らしても、見つけることは出来なかった。

とにかく、腕の持ち主を探さないといけない気がして、あたしは腕を抱えてみた。重かった。そして、妙に腕に吸いつくように軽かった。腕って、これくらい重いんだ。そしてこの人の腕はあまり筋肉がついていないみたい。脂身もないみたい。細い。ますますあの人に姿が重なる。そして、腕を拾って抱えると、いろんなものが見えてきた。まずは足元に落ちていたあたしのメガネ。メガネをしたとたんにあたしの目に映る真っ白な部屋。真っ白にまぎれて家具家電が置いてある。テレビみたいなもの、テレビだとしたらたぶんアナログ。ソファ、白。チェスト、白。花、白。茎まで白。病院だってこんなに白くないのに。そして、白い扉。あたしは、腕を抱えたまま扉を躊躇なく開いた。考えて見れば扉の外にはこの腕を切り落とした殺人（？）鬼がいるかもしれないのに。向こうに出ると、さつき出てきたは

ずの扉には鍵がかかる。灰色のコンクリートの通路に取り残されたのは、細い腕と白いあたし。

自分の足音なんて聞こえないふりをしながら歩いていく。通路の向こうは見えない、暗くなっている。灰色のコンクリートの中では、特に色がつけられていないわけでもないこの腕も白い。

一人きりで、果ての見えない廊下を歩いていると「この腕は誰のものなんだろう」って、考え込んでしまう。あたしが好きなあの人の腕なら、幸せになれるのに。あたしが嫌いなあの女ひとの腕なら、今すぐ捨ててやるわ。

装飾も何もない灰色の廊下をずうっと歩いて行くと、ついにつきあたりの壁に辿りついた。壁に辿りつくとも扉が現れる。今度は灰色の扉。開けて見ると、また白い部屋。けれどさっきの部屋とはなんだか違うみたい。見渡してベッドに眠る誰かに気付いた。その「誰か」はあたしが大好きなあの人で、そしてちようど、右腕が欠けていた。

「それで、お嬢ちゃんはその人をどうしたんだい？」

「別に、どうもしませんよ。それで終わりです」

「ふうん、本当に夢の話なんだね」

「本当何も、嘘なんか吐いてませんよ。証明できないですけど」

「証明は難しいだろうね。まあ、結構面白かったよ。

はい、ちようど焼きあがったし」

「それだけですか？」

「それだけって、どういうことだい？」

「あたしはいっぱい喋りました。おじさんの番ですよ」

「ふうん、君は俺の話を聞きたいというのかい。なかなか面白いとは思うよ。まあ、俺だって、多分、お嬢ちゃんよりはずっと長く生きているからね。それこそわからないよ、もしかしたら八百比丘尼みたいな存在かもしれないし、唯の的屋の人間かもしれない。ただ、ただねえ、お嬢ちゃん。客商売をする身の人間が、どうしてまず相手の人間に喋ろうとき

せたのか、お客様にわざわざ口を開かせたのか、わかるかい？」

「それは、そういうサービスか何かじゃなくて、ですか？」

「サービス！ そんなものがあつたら素敵だね！ 言ったか忘れたけど『俺は君の話が聞きたい』から君から話を聞きだしたんだ。つまり、自分の話はしたくないのさ。だけどさ、それはタブーだよ。お客様を煩わせるわけにはいかないし、お客様が俺の話を聞きたいというなら話さなくてはいけない。だけどね、お嬢ちゃん、タブーの度合いって言うのもあるのさ。万引きが見つかりそうになったから店員を殺すだなんてこと、ありえないだろ？ 俺の話はそれくらいまでに面倒臭い。俺は君なんか比べて随分と濃密な人生を、君よりもはるかに多く積み重ねてしまったのさ。そんなのは必ずしも褒められたものじゃない。君の思考範囲では収まらないような生きざまだよ。だから、こんなところでタコ焼きを焼いているんだ。いいかい、これは優しさだよ」

「優しさ？」

コ焼きはまだ温かった。

嘘なんか吐いてない。ただ、その先を言っていないだけ。あの人を見た瞬間、あたしはもう理性なんてなかった。動悸が止まらなくなつて、目は見開かれる。歯がむき出しになつて、あの人を腕を握っているあたしの手には、異常なまでの力が入り、爪が食い込む。歯を食いしるる時に、口の中まで噛んでいたらしく、口の中に血の味が滲む。その味で、あたしはやつと理性を取り戻した。ああ、あの人綺麗に腕に、あたしなんかの爪の跡をつけてしまった。ぺたりと座りこむと、足元にナイフとフォークが血にまみれて転がっているのを見つけた。そこで、本当に目が覚めた。

あんな夢を見た理由は知っている。知っているけど、知っているからと言ってどうにもならない。自己嫌悪の中に沈んで、沈んで、あたしは帰ってこれなくなる。帰ってくるつもりがないの。

「この遮断機の傍で、」

あの人を選んだのはあたしじゃない人だった。嬉しきで頭がいっぱいになる、あの気持ちをあたし以

「そう、俺がタコ焼きを焼いている理由はギガ級の生きざまをせめメガ級まで落とすためだよ。それ以上首突つ込んだら、お嬢ちゃん、俺と同じものになつてしまふかもしれないね。まあ、それはそれで面白いかもしれない。俺はお嬢ちゃんと気があうのかもしれないね」

「確かに、そうですね」

ギガ級の生きざま、という言い回しが妙に心に引っかかった。心に残ったわけではなく、それは違和感に近い感覚で沈殿する。

「そう、はいはい、早くお行き。客が来なくなつてしまふよ」

「え、ああ、ありがとうございます」

大きめのタコ焼きが五個、一つのパックの中に所狭しと並べられていた。受け取つて、お金を払つて、軽くお辞儀をして去る。振り返るとあのタコ焼き屋さんが無くなつていふような気がして、怖くて振り返ることができなかった。なんて、非現実的な店なんだろう。踏切をそのまま通り過ぎて、少し道からそれて、遮断機に背を向ける形であたしは立つ。タ

外の人間からあの人を受けていたなんて、許せなかった。けれどそれ以上に、あんな表情をするあの人を見るのが辛かった。あたしのこともあんな風に見てほしかった。それなのに、あたしが無理にあの人の細い腕を掴めど、あの人、振りほどいて先を歩いてしまふの。耳を劈くような警報機の音、背中を通る電車、あたしにはもうそんなもの見えない。

——この遮断機の傍で、あの方は、あの女と、

——今、あたしが立っている、この場所で、あの方は、あの女に、

「あの、女に」

あたしだって、あの女をあの人から引き剥がして、あの人を踏切の中に突き飛ばしてしまいたかった。そうしてしまつたら、あの人の中であたしは永遠だもの。してしまいたかつたのに、そんなこと出来なくて、遮断機の向こうにいるあたしは、今みたいに電車が来て、通り過ぎていく間に、その場から離れた。サヨナラしたの。「グッバイダーリン、幸せな夢でした」なんて気取つて言えたのなら格好よかったのかしら。でも、そんなの、無理だわ。あたしは、

どんなに強がったって、異端ぶったって、怒ったって、狂ったって、人間の皮を脱ぐことができないんだもの。

電車は通り過ぎたらしい。遮断機を背にしたままで、夕日が目に染みるその場で、タコ焼きを一口口にする。タコ焼きは真っ赤に染まる。大きな大きなタコ焼きは一口では食べきれない。一口食べて、いったん口を離すと中から人間の指が出てきた。大きなタコのある、少し骨ばったながい人差し指。あの人の指であるはずなんてない、わかりきっているのに、不思議とその指は怖くなくて、笑みがこぼれた。